



2020.7.12 open  
ウポポイ いんたびゅー  
広報編集室

「どのようなお気持ちで運営本部長を引き受けたのですか。」  
「国交省にいた平成16年あたりからアイヌ政策に携わり始めました。財団が統合されウポポイの道筋が見えてきました。今までの経緯もあり、『立場は変わるが、しっかりとスタートを見届けるまで、もう少し関わってほしい』とお引き受けしました。」  
「運営を統括する立場から開業3カ月、100日間の全体的な評価はどのよう

白開延の地に開設され、7月12日の開業後100日が過ぎた。再度の開業延長や入場、プログラムへの影響というコロナ禍に見舞われながらも、入場者数は12万人(10月現在)を超え、そして今後を語っていただきました。

## 理念遂行の可能性を実感

「ご存知のように、想定外のコロナ禍です。入場の予約制、プログラムの変更、体験の一部休止と、すべて変わりました。そんな中でも私は、アイヌ文化の伝承・創造の場というウポポイ本来の使命を、百点満点ではないにしても十分な可能性を期待できると実感しています。それは若い人や私たちなどスタッフが前向きに考え、行動しようとしていることが感じられるからです。道内外、地元からの来場者に、社会全体としてサポートする気持ちを持つてもらおう活動が着実に進んでいるのを感じています。」  
「文化を伝える、理解してもらうのには一番有効な『体験』や『交流』に制限がかかったことが一番大きな影響です。特に修学旅行生などの満足度が気になります。準備期間中に取り組んだ企画や来場者との積極的なコミュニケーションがままありません。ただ徐々に新しい生活様式として、10月くらいから体験的な部分を試行しながら



公益財団法人 アイヌ民族文化財団 副理事長・民族共生象徴空間運営本部長 對馬一修 (61)

「今後の運営展開へのお考えは。」  
「地元をはじめ、各地域のアイヌ協会、保存会、関係団体など連携、協力

しながら幅広くアイヌ文化の全体を見てもらい、それぞれの地域の魅力を伝えていきます。そのための仕掛けを工夫していきたい。『行動』が『発信』を生むと思っています。来年の夏で開業後一回りですが、3年ともなると長いスパンで自分たちのものにして、次のステップに進みたいですね。」  
「白老町民へのメッセージはありますか。」  
「私も今は白老町の住民ですが(笑)。本居のところが構想、建設、開業と、中を動かすのに精いっぱいだったというのが現状だったよ。うな気がします。果たして十分に地元の皆さんの理解を得られているかは反省点が多くあります。何をやる上でも基礎と想っています。町、町民、経済、観光など地元の理解とサポートが必要だと思います。重要で大切な要素と想っていますので、ともにウポポイを育てるための行動を積み重ねていきたいと思っています。」

## 知っておこう アイヌ文化

# テンキグサ

イランカラップテ。町内のヨコスト地区の海岸線に沿って砂浜を歩いていると、風に吹かれるススキのような植物を目にします。ススキかと思いき、よくよく調べてみると、それはイネ科のテンキグサ(ハマニンニク)と呼ばれる植物であることが分かります。テンキグサはアイヌ語でムリツ(地方によって異なる)と呼ばれ、アイヌ文化では、薬として食あたりの際に全草(全ての部分)の煮汁を飲んだり、または根を干して、風邪の際に煮汁を飲んだといいます。その他にも、葉でテンキと呼ばれる小さな容器を作りました。テンキは特に、千島アイヌによって作られたものが江戸・明治期には広く知られていましたが、その製法は伝承されていないといわれ、近年、各地の博物館に残されたテンキを基に復元制作され、その制作技術と工程が再現されています。チキサニでは、8月20日に町内の海岸でテンキグサの採取を行い、重なっている葉を一枚一枚はがして、束ねた後、天日に干して乾燥作業を行いました。このテンキグサを活用して、11月14日(土)・15日(日)の2日間、コースター作りの体験を予定しております。体験の詳細は本紙の「くらし百科 催し」にある「イオル体験交流事業」をご覧ください。皆さまの参加をお待ちしております。



ススキ(上)とテンキグサ(下)の葉を見比べると、ススキは葉の中央に白い筋が入っている

アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301